

小説 高岡智空  
挿絵 鈴眼依縫

騎士隷奴

エヴァ

国従娼婦の悦印

立ち読み版

第一章

ベルシュタインの剣

006

第二章

家畜牧場

081

第三章

格安娼館の姫

122

第四章

帰還、そして

170

第五章

墮騎士隸奴

208

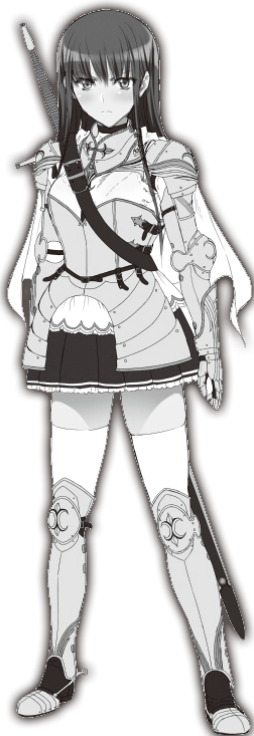
## 登場人物紹介

Characters



### エレノア = ルクテンターク

ベルシュタイン王国の女騎士。武人氣質で、騎士としては他人にも自分にも厳しいが、私生活での内面は乙女。王であるアントニウスと婚約状態にある。



### リーゼロッテ = ファーレンハイド

国内貴族の筆頭であるファーレンハイド家の現当主。内政に天賦の才を誇る黒髪の美女。

### アントニウス = ペルシュタイン

ベルシュタイン国王。今後の統治に向けての憂いを断つべく、北方への遠征を行う。

### イーナ

オーバンに遣える少女メイド。

### オーバン = ラ = メドラグ

ベルシュタインの南方にある、メドラグ王国の王。巨漢で性豪。

そこに書かれている内容は、とても終戦条約とは思えない、破廉恥極まりない最低の文章だった。すべてを読み終えた女騎士は激昂を瞳に浮かべ、雷のような怒声を響かせる。

「貴様らあああつっ！ リーゼロツテッ、これは……いったい、どういうつもりだ！」

そんなもの考えた女に敬意など払う必要もないと、呼び捨てにして睨みつけた。

「こんな……こんなものを、我々が承諾するでもっ……」

バンツと勢いよく円卓に叩きつけた羊皮紙を、怒りの原因である黒髪の美女がクスクスと微笑みながら摘み上げ、その内容を一瞥する。

「あら、貴女が気にしているのは『我々』ではなく、対象が『貴女』となっている条項ではなくて？ まあ、わかりにくいようなら、要約してあげようかしら？」

「ぐはははっ、そうしてやるがいい、リーゼロツテ。その偉そうな女に、自分の立場をわからせる、いい機会だからなあ！」

（こ、こいつらっ……なんという下衆なっ……）

怒りと屈辱のあまり、はらわたが煮えくりかえるようだった。ブルブルと唇を震わせ、口を開くこともできないでいると、リーゼロツテは無言の承諾と取ったのか、自分の書き上げた条約の内容を読み上げようとする。

「簡単なことよ。まず、この条約はアントニウスが帰国するまでの、仮の条約であるということ。次に正式な条約が締結されるまでは、ベルシュタインはわたくし……リーゼロツテ・ファールンハイドが統治し、国民生活は保障される……そして、最も重要なのが――」

一呼吸を挟み、冷たい視線を投げかけてきた美女が、心底からの悪意を露わにし、意地悪く唇を歪めて続けた。

「バルシュタインは敗戦の証として、護国の剣であるエレノア＝ルクテンタークを、正式な条約締結まで国従娼婦としてメドラグに貸与する……どうかしら、わかりやすく説明したつもりよ？」

「ふっ……ふざけるなあああっ！」

激昂して机を痛烈に打ち据えるが、その物音にもエレノアの気迫にも、オーバンたちは動揺する素振りさえ見せない。その態度にもさらに怒りを煽られ、エレノアは円卓を乗り越えて掴みかかりそうになる。だが――。

「あくううつつ!! は、離せっ……貴様らっ、ただでは済まさんぞ！」

こちらが動こうとする機先を制し、メドラグの騎士たちが左右から身体を押さえつけ、無理やり椅子に着席させる。振り払って立ち上がるうにも、剣の腕ではなく純粋な臂力りよりよくで力任せに肩や腰を押さえられると、身体はビクともしない。

「まあ怖い、けどそんなに興奮しても、いいことは一つもないわよ？」

「その通りだぞ、小娘。貴様が暴れば暴れるほど、そのツケが誰に回るのか……よく考えてみるのだなあ、んん？」

ニヤつきながらの二人の言葉に、ハッとさせられる。

（まさか、民たちにつ……）

思わず窓の外に目をやるが、城下の騎士たちに動きはなかった。だが、彼らがその気になれば、無抵抗の民たちはすぐさま凶刃にかかるかもしれない。

この国の支配を目論むリーゼロッテにとって、それは望まないことだろう。けれど、先ほど口にした目的——一番の標的が自分だとすれば、自分に言うことを聞かせるためなら、彼女が強行策を選ばないとは考えにくい。

（だが……だからといって、こ、これを……受け入れると言うのかっ!）

もう一度目の前に置かれた羊皮紙に目を通し、痛いくらいに奥歯を軋ませる。その心の葛藤を見抜いたかのように、リーゼロッテがささやきかける。

「貴女がメドラグの国従娼婦となることに同意し、サインをすれば、民たちに害は及ばないわ。それにこの条約は仮のもの……いくら戦争に勝利したからといって、国王不在の国を奪ってしまったのは周辺諸国の反感を買ってしまうものね。だから、ここに書かれてあるように、アントニウスが戻ればこの条約はすぐに破棄し、会談を開いて新しい条約を話し合う予定なの。つまり、貴女と国民はそれまでの人質というわけよ……あとは貴女が我慢をするか、それともしないか——それだけの選択なのだけれど？」

（わかつているっ……そのくらい、私にもわかる……くっ、うううっ!）

国従娼婦——キルト大陸南部の諸国において広く知られる、最低の職業。

かつて高い身分や家柄にあった者が凋落したとき、新たに権力を手にした者が、元の権力者に連なる女たちに下す罰がこれだ。国従娼婦となった者は、その国と国に属する者た

ちに所有され、あらゆる命令に従わなければならない。

周辺諸国では公用娼婦とも呼ばれ、国の支配者が変わるたび、数人がこの地位に落とされてきたとされている。もつとも、この数十年では一人もいないはずなのだが――。

（わ、私が……娼婦に、など……そんな、そんなバカなことがつ……）

自分の身を売る、最低の仕事――しかも国従となれば、どんな扱いを受けるか想像もできず、考えただけで怖気が走った。心臓が激しく脈打ち、息が荒くなってくる。

「……決断できんようだな。ならば十人ほどに見せしめとなってもらうか。エレノアが我が身可愛さに、条約を結ばなかったせいだと言つてな」

「つつつ！　ま、待てつ……わかった、サインを……する……」

羊皮紙の隣に立てられた羽ペンに手を伸ばすと、オーバンの唇がにんまりと歪められた。いまのはブラフだったという可能性もあるが、それでも――。

（私は、国を……民を、守らねばならない……責任があるっ！）

カタカタと身が震え、瞳が揺れる。けれどアントニウスが帰ってくるまで、この身一つで国を守ると約束したのだ。それを違えるような真似が、許されるわけもない。

（だが……すまない、アントニー……もう私は、貴族では……）

彼と釣り合うにはまだ足りない、それでも僅かに近づいた身分の差が、この一筆ですべて崩壊する――悔しさに唇を噛みながら、なんとか記入を終える。

「できたぞ……これで、ベルシュタインの民たちには……」

「ええ、彼らにはこれまで通り——いいえ、これまで以上の生活を保障するわ。それじゃあ、確認させてもらうわね……ふふ、結構よ」

取り上げられた薄い羊皮紙に、自分の運命が託されたかと思うとやり切れなくなる。だがそれでも、国主代理として最低限の仕事はできた。

「たしかに、貴女の名前の記入も、家紋の押印もされているわ。だけど、内容はちゃんと確認したのかしら？ たとえアントニウスが戻ってきてても、これを破棄して新たな条約を締結する前に、貴女が国従娼婦で居続けたいと願えば、この条約全体が永久に効果を持つ……そう、書かれてあるのだけど——」

「ふんっ、そのようなことを思うわけがない……構うものかっ」

吐き捨てるようにそう言くと、リーゼロッテは満足げに微笑んで、大事そうに羊皮紙を丸め、ふところにしまい込む。

「その自信、最後まで保つといいわねえ……それでは、オーバン陛下？」

「うむっ！ ぐふふ、待ちかねたぞ……お前たち、そやつを押さえておけ」

脂ぎったガマガエルのような顔が満面の笑みで歪み、それを見た瞬間、嫌悪が背筋を震えさせた。しかし反応を示すよりも早く、騎士たちがエレノアを椅子から引きずり下ろし、床に上体を押しつける体勢を強制してくる。膝を折り、尻を高く掲げたみっともない姿に、カァッと頬が熱くなるのを感じた。

「なっ……なにをするっ、いきなりっ！ くっ、放せっ……放さないか！」



「あらあら、ダメよ、エレノア？ その方たちは、貴女が従属するメドラグ王国の騎士様なのだから……なにをされても、絶対服従しなければね？」

いつものような温和な話し方、優しい口調だというのに、その顔には凍りつくように冷たい笑みが浮かんでおり、ゾッと心胆から寒くなる。

（なん、だと……まさか、ここで……ベルシュタインの城内、それも……）

会談の席でそのような行為に及ぼうというのか——思った瞬間、全身に鳥肌が立った。だがいくら暴れても、不利な体勢な上に二人がかりで男に押さえ込まれては逃れることもできず、後ろ手に縛られてしまう。

「ふはははっ、暴れるのも結構だがな！ 貴様が抵抗すれば、あの条約などなかったことになる、それを忘れぬことだぞ！」

（——つつつ！ 卑劣なっ……だが……くそっ、くそおっ！）

床に組み敷かれたその顔の正面にオーバンの足が近づき、頭上から野太い、酒に焼けたガラガラ声が響く。条約と民たちを人質に取られ、どうすることもできないこの身が齒痒くてたまらなかった。

「ぐっふふふ、実に二年だ。あの戦いで貴様に辛酸を舐めさせられ、この日をどれだけ待ち侘びたことか……その身に、たつぷりと教えてやろう！」

「ふんっ……好きにするがいいっ、だが——ひゃうんんつつ!!」

背中側にオーバンが回り込んだ瞬間、尻肉に食い込んだゴツゴツとした感触に、たまた

ず悲鳴をもらしてしまう。

「んん？　だが、なんだ？　はつきり言わんと聞こえんなあ……ぐふふ！」

「だ、だが……あつ、ぐうつ、い、つかあ……こ、後悔、いいっ！」

凄まじい嫌悪感が全身を走り抜けた。臀部を割り開くように尻タブが驚掴みにされ、肉の形を歪ませるほど強く、モニュモニュとなんの遠慮もなくショーツ越しに桃尻を揉みしだかれ、震えが止まらなくなる。だが――。

（な、なん、だ……んぐうつ、こ、これ、はあ……あうつ！）

尻肉の奥で燻っている小さな火種が、オーバンのいやらしい手つきに反応して、下腹部をピクンッと跳ね上がらせる。円を描くように、左右から持ち上げるようにお尻を弄ばれる、この感触には覚えがあった。

「うふふ、やけに艶っぽい声をだすこと。まさか、憎き敵国の王にお尻を揉まれて感じている……なんてこと、言わないわよねえ、エレノア？」

「だ、誰が、その……よ、うな……くうつ、ふううつ！」

ギリギリッと歯を軋ませ、唇を痛いくらいに引き締めて、胸の奥からもれ溢れる声を押し止める。けれど、頭上からかけられたリーゼロッテの声を聞いた瞬間、自分の身体に熱を帯びさせるこの行為の正体に気がついた。

（くっ、はあ……リーゼ、ロッテ……貴様は、これを……っ）

日頃からなにかにつけてスキンシップが多かったリーゼロッテの手技、その動きと酷似

している。思えば、彼女はいつも自分の尻ばかりを狙い、このような動きで採みしだいていた。最初こそその行為に驚いてばかりだったが、慣れてしまえば肉の芯に染み込んでくるマッサージのようなその感触は心地よさも感じられ、そうやって触れられると全身が弛緩するようになっていた。

（ま、さか……はあつ、うつ、ああ……これすらも、計画の内なのか……）

だがそれは、あくまでスキンシップに安心しての感覚と思っていた。それをこんな男に——醜く下劣な男の手にされて、自分の肉体がこんな反応をしていることが信じられない。

「よい尻をしておるなあ、エレノアよ。ムッチリとして手に吸いついてくるだけでなく、触れておるだけでプルプルと震えているぞ。まるで、もっと揉んでくれと言っておるようではないか、ぐははははっ！」

「そんなわけがあるか……あうんっ、んっ、くううっ……」

鍛えてはいるが、それでも女性特有の柔らかさが残る肉が押し込まれ、指先に尻肉を撫で回される。布地を挟んでもわかる脂づいた指の感触がおぞましい、けれどそれすらも燃料にして肌の奥が妙に燃え上がり、身体が熱く火照る。

「むふふ、アントニウスの小僧と夜の生活はなかったと聞いている。リーゼロッテにされるまで、女の身を悦ばせる触り方を知らなかったようだな」

「ふっ、はっ……こ、これが、そうだとでも……？ バカな、こんな、ものお……おうっ、んっ……き、気持ち、悪いだけだ……はうんっ！」

憎まれ口を叩こうとすれば、喉奥からこぼれる艶声が会談室に響いてしまう。せめて身体が反応を示すのをこらえようと、皮膚に爪が食い込むほど手を握り締め、絨毯に顔を埋めてフッフッフッと荒い息を押し殺す。

それでも、男の指が尻の谷間をなぞり、尾てい骨をつつくように擦り上げ、尻肉を引っ搔いて愛撫を加えてくると、たまらず腰が跳ねて脚が震える。

「それにしても短い、下品なスカートよな。それでいて、このように洒落た下着を着けておるとは……ぐふふ、戦場を社交場とも思っておったのか？」

「くふうっ……んくっ、き、貴様あつ……」

シルクで上品に飾られた、淡い紫色の可愛らしい下着の端が掴まれ、強引に引っ張り上げられた。股布の部分はたちまち細く振れて股間に食い込み、絹が肌に擦れる感触にゾクリと背中が震える。尻房が露わになり、室内の空気に撫でられて、お尻の肌を晒される羞恥に耳元まで真っ赤にさせられる。

「ほおおっ！ 戦場に出る騎士にしてはなかなか白い、美しい肌ではないか。たまらんなあ、この肌を好きに蹂躪できるなど、実にたまらんわ！」

「や、やめろっ、はくっ……んっ、んううつつっ！」

オーバンの鼻先が肌にベチャリと擦りつけられ、思いきり息を吸い込むのを感じて怖気が走る。女性として最も隠したい濃厚な体臭を、これほどの至近距離で嗅がれているなど、あまりの仕打ちに気を失いそうになる。



「……ザ、ザーメン、お恵みくださって……あ、ありがと……おおおっ!!」

背後から尻を掴んで腰を振っていた少年が急に腰を抱き、股間に手を滑らせて陰核をキユツと捻り上げた。それと同時に、膣肉を震わせるほどの熱い奔流が、牡膣を脈動させて吐きだされてゆく。

——ドピュツ、ドクドクドクウウツ! ビクツ、ビュクンツツ!

「ほあああつっ!! んくひつ、ふあつ、あはああつ……んっ、んううっ!」

全身を犯すような精臭の氾濫に蕩けていた肉体が、不意の射精に一際大きく蠢動し、ゾクゾクゾクウツと下腹部の奥深くから疼きが込み上げてくる。

(なん、だっ、これはっ……んくっ、だ、駄目だっ……あつ、くううんっつ! ああつ、イクツ、くううっ……んふうううっつ!)

擦りつけられるペニスサイズはさほどもなかったはずなのに、少年の精液量は尋常ではなかった。それまでの二人分の膣内射精と二人分の口内射精、それらを合わせたよりも遥かに大量の精が、ドプンドプンとポンプのような勢いで肉棒から排泄され、膣道に注ぎ込まれてゆく。

「ひあああああつっ! んひっ、はっ、熱、いいんっ! あああつ、奥つつ……んっ、な、流れてっつ……ああああつっ!」

ニチャ、グチュウ……と膣粘膜が精液を嘔みしめるように蠢き、熱粘液が肉襞に染み込んでゆくのを感じる。ドプウツと噴きだす新たな射精が粘膜を撫で、さらには奥でわなな

いていた子宮口まで叩き、痺れさせてくる。

「んくっ、くああああ——っつ！ イクッ、イクウウッ……んううっつ！」

ガクガクガクッと激しく四肢が痙攣し、背中が二度、三度、ビクビクンッと大きく跳ね震えた。その衝撃に思わず口をついた絶頂宣言に、男がニヤリと唇を歪める。

「はははっ、こりやすげえな！ ザーメンの味だけでイッチまったかあ？」

（そ、んな、わけがっ……あくっ、ううっ……んくううっつ！）

否定しようとすればするほど、全身が敏感になってより強く精の臭いを感じてしまい、絶頂の余韻が広がってしまう。緩やかな絶頂を味わったからか、頭の中は逆に意識がはつきりとしている。けれどその一方で、身体には力が入らず、ガクンッと腕が崩れて上体が倒れ伏しそうになる。と——。

「たまんねえなあ！ へへっ、悪いが小僧ども、先にヤラせてもらうぜ！」

脱力しきった身体が背後から力強い腕に抱き上げられ、脚をM字の大股開きに支えられ、衆目に晒されたドロドロの陰唇に長大な肉棒が這わされる。

「んはああんっ……ん、な、なに、を……するっ……うんっ！」

「一回だけじゃ物足りねえだろ？ もっとたっぷり感じさせてやろうと思ってな……せいぜいよがつて、愉しませてくれよ！」

吼えるように答えた男は軽く腰を沈め、そのまま一気に突き上げる。

——ニチュッ、グチュウウ……ズリュッ、ジュプウウウツツ！

「いぎひいいつつ！ んはっ……ひいい——つつ！」

連続挿入と膣内射精に緩んだ膣口が、木の枝のようにゴツゴツとした男の亀頭に挟られ——刹那、吐きこぼしていた白濁もろとも、膣道奥まで刺し貫かれた。タプンツと波打つ白濁の海が媚粘膜に吸いつき、肉傘によって染み込ませるように塗りつけられ、こぼれないように肉幹で栓をされる。

「んひっ、はっ、はふううう……んっ、んうううっ、くふうううんっつ！」

閃熱が頭の中で炸裂し、脳髓が痺れて蕩けてゆく。抱えられていなければ完全に倒れてしまっていたというくらいに、四肢も腰も背中も、すべての筋肉が弛緩し、マグマのような淫熱に焦がされてゆくのを感じられた。身体の中から外側へ一氣に広がる強烈な肉悦に、意識が桃色に塗り替えられてゆく。

（かふっ、ひゅっ……ひ、ひ、って、りゅっ……んはっ、ふやああっ……）

オーバンの牡牯より、おそらく一回りほど小さいだけの長大な肉棒に、たった一突きで少年たちの肉棒では蹂躪されなかった子宮口を挟まれ、タイトに締まっていた膣肉を開墜されてしまった。強烈な刺激がジン……と膣肉に甘い痺れを響かせ、瞳を裏返らせて舌先を突きだしながら、エレノアは男の腕の中で下腹部から全身に広がってゆく、壊れてしまうほどの快感奔流に飲まれる。

「ひぎっ、いつ、はっ……ひゅんっ、ひっ、ひあああ……」

——ジョボッ……チョボボボボッ、ジョロロロロッ……。



(やつ、らああ……と、まれ、あふつ……んつ、んああ……)

ビクンツ、ビクウツ！ と雷に撃たれたように全身を痙攣させ、弛緩する筋肉に歯止めをかけられない。幼児のような情けない姿で放尿させられても、止めることも隠すこともできず、ただ身体を跳ねさせることしかできない。

「うわっ、見ろよ！ ついにもらしやがった！」「へっ、よつぽどよかったんだろ、あの騎士様のチンポがな！」「くはああっ！ 早く俺らの相手もしてくれねえもんかねえ！」

(あぐっ、ひゅっ……み、見る、なあ……言う、にや……ひふっ、ひっ……)

朦朧とする意識の中、男たちの言葉だけがグルグルと頭を駆け巡る。けれど唇からは途切れ途切れになった喘ぎと吐息しかだせず、緩みきった尿道は勢いよく小水を放出し続け、美しい黄金色の弧を描いて飛沫を撒き散らしてしまう。

「ぎやははははっ、どうだよ！ いい年して屋外で小便もらしやがって、見られまくってんぞ！ 小僧どもも男たちも、てめえの醜態に釘付けだぜ！」

(はふっ、ふやつ、み……見られ、てえ……んくっ、うふうううっ……)

蔑みの言葉とともに突き刺さる大量の視線が羞恥を煽り、背中を這い上がる恥辱の炎が頭を焦がす。けれど不自由な拘束に加えて男の腕に抱かれているという状況、しかも自分の四肢が言うことを聞いてくれない状態では、そこから逃げるなどできはしない。

「やああ……はっ、んやつ、お……下ろ、せ……はぐうっ、あああっつ！」

「はっ、誰が下ろすかよ……つと、そうだな。どうせなら、このままの姿を周りにしっか

りと見てもらおうじゃねえか。ほれ、行くぜ」

「んええつ……ひはああつつつ!? あきゅつ、ひやめつ……ひああつ!」

いまだに黄金水を股間から噴き上げたままなのに、男が歩みを進める。一步進むたびに、突き刺さったままの肉棒が地震のような振動を膣奥に伝え、気が遠くなるような鋭い肉悦を、ズシッ、ズチュウッ! と身体の芯に刻み込んできた。逞しい牡棒に押し込まれ、快感が突き抜けると同時に尿口からも、勢いを増した水流がブシュウッ! と激しく噴出してしまふ。

「んきゅつ、ひはつ、ひはああつつ! とつ、止まつ……れえええつ!」

耳を塞ぎたくなる下品な音を鳴らし、放物線を描いて地面に降り注いだ恥水は黒々と染みを作り、甘酸っぱい臭いを漂わせる水たまりになってゆく。それを嫌悪と蔑みの視線で眺めていた観衆の顔が、男の歩みに合わせて少しずつ近づいてくるのが、霞む視界にぼんやりと浮かんでくる。

「おほおおつ、来た来たああつ!」「どんだけ小便溜め込んでんだ、この娼婦はよお!」「便女のクセにおもらしたあ、しょうがねえな!」「へっへっ、もつと見せてくれよ!」

「んぐつ、うううつ……うるつ、ひやいいい……くあつ、あああ——つ!」

せめてもの抵抗に口を開くも、太ももを抱え上げる男の手がグウッと下腹部を押し込んでくる。その瞬間、さらに勢いを増した膀胱からの奔流が柵の内側にビシャビシャと弾け、下卑た野次を飛ばす国民たちに汚飛沫がかかる。

「うひゃあつ、こつちまでかけやがつて!」「さつすが元お貴族様だ! だすもんも、葡萄酒みてえに上品な臭いじゃねえか!」「違いねえ、はははっ!」

(あひゅううつ……んだつ、だま、れえ……黙れつ、くつ……ひいひいっ!)

耳を打つ嘲笑の叫びに羞恥が溢れ、頬も耳も首筋も真つ赤に染まり、頭が沸騰するくらいに恥ずかしくてたまらない。

「おらおらつ、残つてゐるんなら全部だしちまえよ、ほおれっ!」

「ひぎああああ——つつつ! あうつ、ほおおつ、ははおおおつ!」

下腹部を二度三度と押し潰されて尿意を後押しされると同時、啞え込んだ肉棒がお腹側の膣壁に擦りつけられる。瞬く間に目の前は白と黒に明滅し、狂おしいまでの快感が血管も神経もすべてを駆け抜け、頭を貫いてゆく。

(んあああああつ!! やめつ、ろおおつ……あぐつ、んうううつつ! 奥つ、響くううつつ、押すなつ、突くなああ——つつ! あひゅつ、ひつ、はひいひいつつ!)

「んきひいひいつつ、イクツ、イクうううつつ! くひい——つつ!」

ビクビクビクウウツ! と全身が弾け、またも雷に撃たれたような痙攣の波に包まれてゆく。男の肩に首を預け、完全に上を向くくらいに背中が仰け反り、胸板に乗つて形をひしゃげさせた乳房がタブンツと波打つようにたわむ。

下着を貫かんばかりに勃起した乳頭が、布地に形を浮かび上がらせる。周りからものはつきり見えるくらいに硬くなつたそれが、ヒクツヒクツと息づいたように躍るのを見て、周

囲からも歓声が上がる。

「ひゅーっ、エロい乳首してやる！」「もつとそつちも弄つてやれええっ！」

「へへへっ、リクエストされちゃ仕方ねえよなあ……おいっ、小僧ども！ こいつの胸で遊んでやりな！ 好きなように弄ってみろ！」

その声に応じて、まだ挿入を済ませていなかった少年騎士たちが慌てて駆け寄り、ベビードールをまくり上げて、隠されていた豊乳を剥きだしにする。

「くひゃああっ、みひっ、りゅ……なああっ！ んくっ、ひううう——っ！」

男の僅かな腰使いですぐさま言葉を封じられ、快感に全身を跳ねさせながら、エレノアはその身を衆目に晒させられる。

染み一つない、シルクのような光沢さえ見せる美しい肌はほんのりと桜色に染まり、絶頂の余韻に合わせて肉丘がピクンピクンと切なそうに震える。大の男の手でも収まりきらない、大型の果実のような乳房はツンと空を突くような形よい美乳で、手錠で拘束された自身の両腕に挟まれて押し合い、魅惑的な谷間を作って男たちの目を愉しませてしまう。

「うおおっ、揉みてえ！」「お、お若い騎士様よお、早く廻つてやれえっ！」

小指の先くらいに膨らんだ濃桃色の小振りなニブルと、ムニムニと柔らかそうな肉感を伝える白乳肉が艶美なコントラストを見せつけ、牡の獣欲を誘うのか。国民の声に應えるように少年騎士たちはフラフラとエレノアに歩み寄ると、躊躇うこともなく唇を乳房に吸いつかせ、はしたなく吸い上げる。

「はむっ、んぶっ、じゅるるっつ!」「ちゅうううっ、んむっ、あむう……」

「くほおおおお——っつっ! おんっ、んむううっ……む、ねっ、やめええっ……ひぎっ、いひはあああああつっ!」

ガクンガクンと頭が躍り、髪を振り乱し、獣の咆哮じみた嬌声を響かせてエレノアは快感に打ちのめされる。それを見て男は唇を歪めると、女騎士の身体を神輿みこのように上下に激しく揺さぶって、肉壺への刺激を強くする。

「おらっ、どうだよっ、国従娼婦が! 俺がイクまで何回イけるかねえ……ほれっ、ほれほれっ、ほれええっ!」

——ニユプジュプグチュウウツ! グプツ、ニユルルツ、ジュブウツ!  
「あああああつっ、イクツ、イクウウウツツ! きひいいいいんっつ!」

張りだした肉傘に膣肉すべてをくまなく擦られ、挟られ、僅かな腰の動きにさえ意識が飛びそうになるほどの甘刺激を送り込まれてしまう。先ほどの絶頂の余韻も抜けきらぬ、性感神経が剥きだしになったように過敏な性感帯を激しく責められ、込み上げる牝の欲情を止めることができない。

「んひいいいつつ、ゆ、ゆら、ひや、な……いれええつつ! イクツ、イツて、りゅうううっ……ひああああつっ! むねっ、胸もおおおつっ!」

乗馬時のような縦揺れに乳房がブルンブルンと激しく弾むも、先端は少年騎士たちの唇や歯に挟まれてひたすらしゃぶり続けられ、唾液に塗れて快感に痺れっぱなしになる。秘

部からの快感に背筋が貫かれ、先端を固定されたまま引つ張られる乳房からの刺激に胸を挟まれる。その肉悦が相乗効果で身体の官能を煽り、意識が真っ白になるほどの悦びが頭を埋め尽くしてゆく。

（もうっ、ひゃっ、ひくっ……イグッ、イグウウウツツッ！ んきひいいつつ、やめ、てえええつつ、ああああ——つつっ！）

いまだ高い位置に留まった太陽の下で、これほどの痴態を晒していることが信じられない。残された糸クズのような理性が、これは悪夢なのだと訴えかける。けれどそのたびに、全身を刺し貫く快感の槍が現実を伝えてくる。

（わふっ、あふっ、わ……ら、ひ、はあ……こ、え……こえ、があ……しよ、娼婦、なの……か……んおっ、ほっ……おほおお……）

瞳はどこを見ているかわからないほど霞み、唇は緩みきり、舌がデロンとだらしなく垂れる。もう全身に力は残っておらず、呼吸さえも覚束おぼつかない。

——その耳元に、男の嘲笑が響く。

「氣い失つても氣にするこたあねえぜ？ どうせここでのてめえは、ただの性処理便器と変わんねえんだ。その間に、孕んじまうぐれえ、マンコの奥をドロドロにしてやるぜ……ひやはははっっ！」

それを聞かされてなお、エレノアの心に残るのはただの一言——ふざけるな、という男たちへの怒りの言葉だけだった。



「この会談は閉会となりますわ。以前の条約の恒久化に伴い、彼を捕らえるように」

「はっ」

短く答え、騎士たちは床にへたり込んだままのアントニウスを無理やり立たせると、両腕両脚を縛って床に転がす。

「ぐあっつ……な、なにをする、貴様らっ……エレンっ、お願いだ！ 正気に……」

取り押さえられたアントニウスがそう訴えかけても、もはやエレノアは動く気さえなかった。ご主人様に受け入れてもらえた悦びに満たされ、頭の中が桃色に染まっている。

（あふっ、はんっ、はぁぁん……よ、良かったぁ……やっつ、お許しをいただけた……娼婦にしてもらえたぁ♥ オマンコ、していただけるうっ……んふっ、んふうう……）

唇が緩みきり、舌がダラリと垂れ伸びて涎が流れるのも気にしないで、お預けされた犬のように、褒美を与えられるその瞬間を待ち続ける。

（早く、オチンポッ、オチンポォ……くださいませ、ご奉仕させてくださいませ♥）

待ちきれないという素振りのエレノアの表情と態度にオーバンはニヤリと笑うと、椅子にふんぞり返って告げる。

「よし、ではもう一度だ。娼婦になることをここで誓ってみせろ！」

「は……はいっ、ありがとうございます！ 喜んで誓わせていただきます、ご主人様！」  
表情をパァッと明るくし、先ほどの娼婦ポーズを取ると、淫穴の奥までを広げて見せつけながら、エレノアは喜色に満ちた声で声高に宣言する。



「私、エレノアⅡルクテンタークこと、エレンは——国従娼婦として、メドラグに身も心も捧げ、生涯に渡って仕えることをここにお誓い申し上げます♥ これからも立派な娼婦として国民の皆様にお仕えし、オーバン様、リーゼロット様、イーナ様に支配され、飼っていただいて……たつぷりと舐めていただけるよう、努めますので♥」

末永く、よろしくお願いいたします——そう締めくくった挨拶を聞いたイーナはクスリと唇を歪めて笑い、エレノアに歩み寄ってゆく。

「まともな言葉遣いができるようになったご褒美よ、口を開けてなさい」

イーナが手にしたポットを見て、ゾクンツと背中がわななく。

（あ、また注がれるっ……んっ、んあ、あはあ……）

ペロリと舌を伸ばし、大きく唇を開いてポットから直接精液を注ぎ込まれるのを待った。けれど彼女はポットの口を自らの唇に含み、軽く傾けて中身を吸いだしてゆく。

「んっ……んうう、ふあ……ほあ、くひをあけなひやい……んっ、ぢゆるうう……」

「あむっ、んくっ、んちゅうう……ふあっ、イーナ、ひやまあ……ずじゅっ……」

直接注がれるとばかり思っていたところへ、あまりにも嬉しいご褒美だった。口内から溢れんばかりの大量の精液が、イーナの柔らかい唇から口移しで注ぎ込まれ、舌と唾液の感触がねつとりと粘膜に絡みつき、ジュブジュブと音を立てて擦ってくる。

「あむっ、はみゅうううっ……んじゅっ、じゅばっ、ちゅばあ……じゅるっ……」

「んっ、んじゅううう……れろっ、れるれるっ、じゅるるるう……じゅぶっ、じゅぶ

るっ、ぐちゆるうっ……んふっ、夢中になっちゃって……ほら、あたしの舌と絡めて、ご主人様の目を愉しませるのよ……んむううっ、じゆるるっ、ぐちゅう……」

イーナの舌と激しいディープキスを繰り返しながら、唾液と精液を互いの口内でクチュクチュと混ぜ合わせる。何度も何度も、唇と舌の間に濃厚な粘液糸を引き伸ばし、精液を泡立っくらいに激しく波打たせて掻き回し、味と臭いと感触の心地よさに打ち震える。

（はふっ、あうっ、あんつつ……イ、イーナ様の舌あ……しゅ、しゅごくう……んっ、き、気持ちいいっ……涎、甘あい……んくっ、ちゅぱっ、れろおお……）

少女の舌が歯茎の裏側をチロチロと舐め擦り、かと思えば上顎の口粘膜を丁寧なペロリと舐め上げてくる。ペロペロと舌を舐め返すと、濃厚な女の涎が注がれ、味覚が痺れるような快感で包んでくる。女性らしい甘い味わいと牝の臭いが口内を満たし、鼻腔をくすぐって頭の奥まで痺れさせられる。

「あみゅっ、はぐっ、んむううっ……んっじゅっ、じゅっぱあ……じゆるるっ！」

「ふっ、はふうっ、んふふっ……ちゅっ、ちゅぱちゅぱっ……ちゅぼっ、ぬぼお……」

自分の舌を相手の舌に巻きつけるように動かしながら、精液と唾液をクチュクチュと泡立たせる。その瞬間、メイド少女の唇がキュッと窄められ、優しく粘膜で舌を包み込んだかと思うと、男性器にそうするような動きで扱き立てられた。

「んんんうううつつ♥♥んぶあっ、はっ……はふう……んっ、んむう……」

刹那、ゾクゾクゾクウウッ！ と強烈に背筋が痺れさせられ、思わず頭が真っ白になっ

て口を離してしまう。けれどすぐさま舌を吸い上げられ、唇をピッタリと押し当てられて声も出ないようにされ、荒い鼻息を浴びせられながら舌への口奉仕を繰り返された。

ジュルツと音を響かせて口内に舌が取り込まれると子宮が疼き、緩みきった肉穴から大量の牝蜜が溢れて太ももを濡らしてゆく。離れていく舌に唇を撫でられると、頭の裏側に淫熱がジワジワと広がり、思考回路が一つずつ焼き切れてゆく感覚に襲われた。

『んふっ……ふぁっ、はふ……んぐっ、ごきゅっ、ぐじゅう……ごくっ、ごくう……』

まったく同じタイミングで、二人はゴクゴクと喉を鳴らし、トロリと濃厚な精を嚥下してゆく。胃に流れ込む温かい感触に官能を刺激され、その行為だけでビクッビクッと全身が小さく跳ね、快楽の絶頂を訴えていた。

「ふぁっ……あら、このくらいでイッちゃうなんて……ああ、キスもダメだったのね？  
一晩中オナニーしてなきやならないくらい、身体が満足できなかっただけじゃなくって……  
…キスしてもらえてなかったんだ。可哀想ねえ、エロいキス大好きな牝豚ちゃん？」  
「んっ、んんん……っつっ♥ は、はい……アントニウスは、キスも下手で……唇を  
合わせるだけの、子供みたいなキスで……舌も使わなかったんです……」

「ふうん、それじゃ仕方ないわね……アンタが満足できないのも」  
「ひゃうんっ!? んぁっ、はふうん……」

ペロツと唇を舐められ、もう一度軽い絶頂を迎えさせられた。

「心まで墮ちちゃったせいで、すっかり感じやすくなったみたいねえ……でも、よかった

じゃない。いまのレズキスショーで、ご主人様も満足してくださったみたいよ？」

淫欲に染まった表情を見てクスリと唇を緩めたイーナが、エレノアの頭を引き寄せて、オーバンのほうを向かせる。焦点の合わない瞳で彼の股間を見つめると、もう衣服などでは押さえきれなくらい硬くそり立った肉棒が、その形を浮かび上がらせてパンパンにズボンの前を膨らませている。

「ああ……ご主人様あ、嬉しいです……私とイーナ様のキスで、こんなにされて……」

「うむ、なかなか愉しめる見世物だったぞ。さて……そろそろ、俺の相手をしてもらおうとするか。娼婦のエレンが娼館でどれほどのモノになったか、確かめさせてもらおう」

立ち上がったオーバンが、でっぴりと突きだした腹を揺らして近づいてくる。一歩近づくと、股間で肉塊がビクンビクンと躍動しているのが見え、それだけで淫肉が緩み、ゴポオオ……と大量の牝蜜がショーツの切れ目から溢れだしてしまう。

「は、はい、ご披露いたします！ 娼婦のエレンですが、ご主人様の前ではタダマン奉仕便器になりますので……ぜひ心ゆくまでお使いになって、ドプドプと射精なさってください！ 私のすべてをもつて、ご奉仕させていただきますので♥」

四つん這いになって犬のように擦り寄り、衣服の上から股間に頬擦りする。熱い昂りが肌に伝わり、その牡欲がはつきりと感じられてゾクンツと子宮が疼いてくる。

「そうか、それは愉しみだ！ だがいいな、俺を満足させるのだぞ？ けして、自分だけで勝手にイクな、そうしなければ……どうなるか、わかっているな」

「つつ……は、はいっ、もちろんでございますっ……」

先ほど自分でも誓ったこと、相手を満足させてからでなければご褒美はもらわない——そうしなければ捨てるという暗黙の脅しに心を震えさせながら、熱い吐息を絡ませて唇を開き、伸ばした舌を股間に這わせてゆく。

「失礼いたします、ご主人様あ……はあ、あむっ……んっ、んふうう……」

ズボン越しのディープキスを肉塊に浴びせながら、王族に相応しい豪華な腰回りの装飾を取り外し、衣服を丁寧に素早く脱がし取る。以前であれば着るのにも脱がすのにも手間取っていた貴族の服だが、高級娼館でお客様を相手に何度も脱がせた経験のおかげで、どうすれば一番効率よく脱がせられるか、手に取るように把握できた。

「ほほう、上手くなったものだ……」

「あむっ、んじゅう……あ、あいがほお、ございまふう……んっ、あはあっ！」

ズボンを脱がしてしまうと、贅肉と筋肉で大きく膨らんだ主人の下腹部を包む、ピタリとした下着が現れる。その股間部はズボンのときの比ではないくらい肉棒の形が浮き出っていて、先端など下着からはみだしそうなほど、大きく硬くそそり勃っている。

（あふっ、はああん……こ、これえ……これが、欲しかったんだあ……）

見ているだけでダラダラと口内に涎が溢れ、半開きになった口端から垂れこぼれて床に滴り落ちた。それにも気づかず、何度も肉塊に口づけを浴びせて唾液塗れにすると、立ち込める牡臭に鼻腔をくすぐられて瞳を細めながら、下着を唇でパクツと咥える。

「はむうう……ん、ぶあつ……あはあつ♪」

下着を引っ張り下ろすと、へそに張りつくくらいに反り返った剛直が姿を現し、ブルンツと勢いよく震えて頬を叩いてきた。熱い脈動を訴える肉塊にビタビタと肌を撫でられ、身を焦がす牡の情欲を感じると、相好を崩して頬を擦り寄せる。

（はうっ、す、すごおい……もう、ひと月以上もお目にかかってなかった、ご主人様のオチンポ様あ……んっ、臭いも、硬さも、大きさもお……どれも、最高お♡）

娼婦として何人もの男を相手にしていたが、これほどのサイズは二人といなかった。たしかに他の男たちとの行為でも十分に満足はできたが、牝の本能をこれほどに刺激し、虜にしてしまうほど雄々しい肉棒は、やはりオーバンの牡槍だけである。

限界まで口を開かなければ包めないほどの太さ、喉奥まで咥え込んだら窒息してしまいそうなほどの長さ、そして大きく膨らんだ拳のような龟头と、膣肉を常に刺激して引っ掻いてくれるカリの高さ——そのすべてが心を惹きつけ、肉体を疼かせる。

下品にヒクヒクッと何度も鼻をヒクつかせ、こびりついた汗や精垢を顔で擦り取ると、むせ返るような牡臭に瞳が細められた。思わず舌を伸ばしてしまいそうになるも、慌てて礼儀を思いだし、顔の真ん中に龟头を乗せるようにして上を向いて、潤んだ瞳で上目遣いに主人の顔を見つめる。

「お、お願いいたします、ご主人様……はしたない、淫売娼婦のエレンに……ご主人様の逞しいオチンポ様を、お世話させていただきます……ご奉仕、したいんです……んっ」

熱い感触が唇に触れると、すぐさま甘い痺れが口内に注ぎ込まれる。すぐにでもむしやぶりつきたいが、許可もなしにそれはできないからと、必死に欲求を抑える。

しばらくはオーバンがニヤニヤと笑って見下ろしていたが、唾液をダラダラと溢れ流すエレノアの我慢の表情を満喫したのか、やがてその口を開いた。

「よし、しゃぶれ。そのデカイ乳も存分に使って、下品に奉仕しろ」

「はいっ、ありがとうございますっ……んああっ、はむううう、んむっ……んふっ、んうううっつっ!! んくっ、くふうううんっつっ♥」

ねつとりと唾液を絡めて亀頭に口づけると、たちまち瞳が蕩けてゆく。膣奥をキュンキュンと疼かせながら、涎を浴びせかけたペニスを飲み込んだ瞬間、背筋に痺れるような甘い快感が流れ、身体が大きく跳ね震えてしまう。

（ふあっ、ひゅ……ひゅご、おおおいっつ! ご主人様の、オチンポ様……く、啞えた、だけでえ……あんっ、あつ、イキッ、そ……んくっ、イツちゃ、らめええっ♥）

淑女であれば決して他人には見せないようなはしたない大口を開き、女娼婦は巨大な亀頭に口内粘膜を蹂躪されて快感に打ち震える。触れているだけで火傷しそうな高熱にあごが痺れ、くねらせる舌先からも肉悦が染み込んで、理性の制御を手放してゆく。けれど絶頂は迎えないように必死で抑え込み、苦悶に眉をひそめながら唇を動かす。

「あもっ、んむううう……んぐっ、おごっ……あおおおんっ……んっ、んふうう……」

ぴちやぴちやと音を立てて舌を蠢かし、裏筋からカリ全体を丁寧に舐め回してゆく。そ

のまま頭を動かしてゆっくりと肉幹を頬張り、頬を大きく膨らませながら喉に亀頭が擦りつけられるくらい深く咥え込むと、熱く脈打つ肉棒全体を舌腹でしゃぶり立てる。

「おむううつ、あぶつ、ちゅむうう……じゅるつ、じゅつぷつ、ぐぷつ、ぐぽおお……」

唇の内側が熱い肉塊に触れ、ゾクツゾクツと背中が跳ねる。フーツフーツと鼻息を荒くしながら頭を揺すると、まるで口内が腔になってしまったような強烈な快感が頭の奥にまで突き抜け、肉体のあちこちで淫熱が弾け飛んでしまう。

（んひゅつ、ひゅご、ひゅぎいい……もつ、らめつ、またつ……んうううつ！ イッチや、だめええ……んつ、んふううつ……くひゅううんつつ！）

官能の頂で、気を抜けばその縁から転がり落ちてしまいそうな状態で懸命にこらえながら、ご主人様のためにエレノアは乳房を掬い上げる。

「んちゅつ、ちゅばつ、ぐぶじゅるううう……んつ、ふううん……んぐつ、んふうつ！」

タプンツ、と弾ませた肉丘で剛直を擦った途端、甘い疼きが胸の奥に染み広がってゆく。甘い吐息をもらしながらも下着をずらして豊乳を空気に晒すと、唇に含みきれなかった長大な肉幹を挟み込み、そのまま両手で左右から押さえつけ、ゆつたりと上下に揺すって抜き上げてゆく。ドクドクと音が聞こえそうなほどのペニスの脈動が乳肉を震わせ、そのはち切れそうな牡の欲情を牝の象徴とも言える乳房に受け止めると、肉体の興奮はすぐさま最高潮にまで昂らされてしまう。

（あはあつ、熱ういっ♥ こんなにおつきくて、オッパイから溢れそうなくらい暴れてら





つしやるなんて……ご主人様のオチンポ様、すごく素敵い……んっ、ちゅぶ……)

普通の男であれば、この乳奉仕で簡単にペニスを含み込んでしまえるというのに、主人のモノだけはまるで別格だった。口端から溢れる唾液を潤滑油にして、ニチュッグチュッ……と粘水音を響かせて乳扱きを浴びせていると、奉仕しているはずなのに、逆に乳房を犯されているような気分になえてくる。しかも動きに合わせて唇も口内も、奉仕に使っているすべての性感帯が刺激され、快感に意識が蕩けさせられてゆく。

(あひゅっ、ふあっ、あはああ……こ、こえ、られえ……んっ、はううんっ！)

ブルツと肩を震わせて、乳房が蕩けてしまうような快感に染められながら、それでも奉仕を滞らせないように身体を上下に揺すって、乳肉で肉幹をしっかり扱き、舌と口内粘膜をフル活用して亀頭奉仕を浴びせてゆく。唾液の飛沫が頭を振るたびに撒き散らされ、口内に溢れる先走りと混じって辺りに牡臭を漂わせ、鼻腔をくすぐってくる。

その臭いにも煽られてさらに情熱的に舌をくねらせ、乳房を自ら採みしだきながら扱き続けていると、髪を梳くような手つきで頭を押さえつけられる。

「ぐふふふ、よい塩梅だぞ、エレンよ。随分と、娼婦としての技術が身についておるではないか……昨晚のイーナも素晴らしかったが、お前も負けてはおらぬぞ？」

「んぐっ、ぷああ……んふう、ありがとう、ございまふう……あむっ、んちゅっ、ちゅばああ……れろっ、れるううんっ……れもお、イーナひやまには、まらまら及びませんので……今後は、もつともつと努力いたひまふう……んあっ、おむうう……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中

平凡な少年が女体化!  
鬼に狙われた  
従姉妹を護れ!!

目覚めると従姉妹を護る美少女剣士に  
なっていた

〔小説：狩野景／挿絵：天鬼ごうり〕



全国書店で  
好評  
発売中

男の子と女の子——  
二つの性の間で揺れ動く  
男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

オトミコ! 僕は男の巫女娘

〔小説：大熊狸書／挿絵：大空樹〕

思春期なアダム  
アウトサイド・ドア  
爪説：さかき傘／挿絵：天海雪広



全国書店で  
好評  
発売中

真夏のキャンプ場で勃発する  
天使VS魔族VS人間の  
三つどもえバトル!

## 既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 仙魔学園戦姫ノブナガ!! ①～③
- ピルグリムメイデン ①～③
- 不死の吸血鬼がDSのご主人様を募集しているようです

- 思春期なアダム ①～④
- 呪詛喰らい師【カースイーター】 ①～②
- 女幹部メル様のセカイ征服計画!
- 借金お嬢クリス ①～④
- 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園ブラックキャット

◎ KTC - KILL TIME COMMUNICATION

http://ktcom.jp/

KILL TIME COMMUNICATION

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はこちらからどうぞ!

DLsite.com

会社概要 資料請求 ご利用方法 通報問合せ

買いたい物かご 現在の合計 0円

更新

お知らせ ロ次元ドリームフェア開催中! お買い上げのお客様先着で特製クリア!

二次元ドリームノベルズ  
二次元ドリーム文庫  
二次元ドリームマガジン

二次元  
ドリームフェア  
2D DREAM FAIR

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

5/31日 09:11

ヴァルキリエ



http://www.comic-alkyrie.com/

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

cranberry



http://www.cran-berry.com/

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

mille-feuille  
ミルフィーユ



http://www.mille-feuille.jp/

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

モバイル二次元  
ドリーム



http://www.2d-dream.jp/



二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!